
出会い（『夕日』の番外編）

レンタン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

出会い（『夕日』の番外編）

【Nコード】

N7082P

【作者名】

レンタン

【あらすじ】

夕日シリーズ第三弾です。10月24日に本編の「夕日」が完結してから約2か月が経ちました。今回は主人公のユウタとヒロインのミカがどのようにして出会ったのかをミカ視点で書いていきます。

それはまだ二人が付き合い始める半年前の物語。1カ月前までつき合っていた恋人は浮気していたことをわたしが見つけてしまって、別れを告げられた。

そんなとき同じ会社の一人の男性にわたしは強く惹かれた。彼は会社帰りに街の中心部にあるベンチに座って沈みゆく夕日をよく見つめていた。

1、鼓動の高鳴り（前書き）

登場人物

藤井美香 22歳

新日西産業株式会社の商品開発部の社員。1カ月前につき合っていた恋人と別れたばかり。最近親友のヒトミに恋愛相談をしている。

田中瞳 22歳

同じ会社の受付係の社員。親友のミカから恋愛相談を受けている。

井上勇太 23歳

同じ会社の営業部の社員。ミカが一目惚れした相手。

1、鼓動の高鳴り

1、鼓動の高鳴り

会社帰り、駅までの道、わたしは足を止めた。よく晴れている空、見つめる視線の先は沈みゆく夕日。東から西へ、青から濃いオレンジに染まっていく空、わたしはその先に引き寄せられるように歩いて行った。

（きれいー。あつたんだ……こんな街の真ん中に……）

気がつくとなたしのそばには一人の男性が立っていた。わたしと同じように沈みゆく夕日を見つめている。年はおそらくまだ20代前半、よく見ると会社ですれ違ったことがあるような気がした。

（誰だっけ？ ……話しかけてみよう）

「あのお……すみません」

「はい」

すると彼はこっちを向いて問いかけに応じてくれた。

しばらく見つめ合う二人、なぜだか心臓の鼓動がどんどん早くなっていく。その瞬間嬉しさがこみ上げてきて、身体を中心に何か熱いものが駆け巡る。これが二人の出会いだった。

その日の朝、駅を降りて街に出ると一人の女性に声をかけられる。

「おはよう、ミカ」

「おはよう、ヒトミ」

この女性は田中瞳さんといって、同じ会社に勤める同期でわたしの親友である。

「早いね、今日は」

「うん。いつもよりちょっと早く目が覚めたから」

「そうなんだ。それでどう？ 最近」

「だいぶ楽になってきたかな」

「そう、よかった」

1カ月前につき合っていた彼氏と別れたわたし、そのせいで落ち込み暗い日々を過ごしていたが、彼女がいろいろと元気づけてくれた。「はあーあつ、でもなんで上手くいかないんだろうな」

「まだ会ってないからじゃない？ 運命の人と」

「運命の人か」

「うん。ミカさ、男の人と出会ったときに胸が高鳴ったことってある？」

「ないけど」

「そう。じゃあ、まだ出会えてないんだって」

「そうなのかな？」

「うん。本当に運命の人と出会ったとき、お互いの想いが通じ合って心臓の鼓動が早まってくるんだって」

「えー、それホント？」

「ホントだよ？ 信じられない？」

「うーん……じゃあ、ヒトミは経験したことがあるの？」

「それは……ないけど」

「ないんだ」

「だって私はまだ会ってないから」

「ホント？ 実は適当なこと言ってるだけじゃ……」

「じゃあ、信じないんだ、ミカは」

「まだ別にそういうわけじゃ……」

「いいよ。でも頭の片隅においてね、起きたときに分かるように」

「……わかった」

まだこのときは半信半疑だったわたし。ところがその日の帰り、わたしは思わぬ経験をすることになる、そしてそれが未来を変えていった。

2、調子の好転

2、調子の好転

わたしは2年ほど前からこの会社に勤めている。所属している商品開発部はその名の通り、新しい製品の開発や提案をする部署だ。そこには上からの指示に合わせていくつかのプロジェクトチームが立ち上がり、その中でいくつの新しい製品が生み出されていく。わたしは特にプレゼンテーションに自信があつて、よく上司の人から褒めてもらうことがあつた。

「おい、いるか？ 藤井君！」

「はい！」

今日もさつきちょうど午前中の会議が終わつたところ、昼ご飯を食べに行く前、チームのリーダーに呼ばれる。

「ちよつと来てくれ！」

「はい！」

わたしは立ち上ってリーダーが座っている席に向かう。

「よかったぞ、今日のプレゼン」

「ありがとうございます」

「これから上に君の企画を提案してみる」

「本当ですか!？」

「ああ、期待して待っていてくれ」

「ありがとうございます！」

わたしは深々と頭を下げて礼を言った。恋人と別れてから1カ月、しばらくはあまり仕事が上手くいかなかった。暗く気持ちが沈んでいいアイデアも浮かばず、いつも“明るくて見てて元気になる”そう言われたこともあつたプレゼンも失敗ばかり。

そんな中今日のプレゼンは久々に上手くいき、リーダーに褒めてもらえたのは本当に嬉しかった。

席に戻ってパソコンの電源をスタンバイにして、財布と携帯とハンカチだけが入った小さなかばんだけを持って立ち上がる。同時に“ピピピピッ”と着信音が鳴ってヒトミからメールが来た。

「一緒にご飯食べ行こう！」

「わかった！！」

「下で待つてるから、すぐ来てね」

「オッケー！」

そういう感じのやり取りで彼女と一緒にご飯を食べる約束をした。彼女はわたしよりも人気のレストランや隠れ家的なおいしいお店をよく知っている。今日はどんどころに連れて行ってくれるのだらう。

わたしは仕事が上手くいった嬉しさもそのままに、ウキウキした気持ちでオフィスを出てエレベーターを降りて行った。

3、高鳴りの訳

3、高鳴りの訳

1階に降りると入り口の前でヒトミが手を挙げている。

「ミカ！ こっち、こっち！」

「お待たせー」

「行こう！」

「うん」

会社を出た二人は街を歩き始める。

「ねえ、ヒトミ、今日はどこに行くの？」

「おいしいお店だよ」

「おいしいお店？ どこなの？」

「それは行つてからのお楽しみ」

「えー、教えてよ」

「だめ、着くまで内緒だよ」

「そんな。いつもそれだもん、ヒトミ」

「ふふつ、でもさ、わたしがおいしくないお店に連れて行ったことがある？」

「……ないけど」

「ならいいよね」

「わかった、いいよ」

彼女はいつもおいしいお店に連れて行ってくれるとき、決まってどこかは教えてくれない。でもこうやって納得させられるのが常だった。

ちよつと悔しい気持ちもあったが、お店のことは彼女に任せて朝聞いた話について気になったことを聞いてみた。

「ねえ、ヒトミ。朝の話のことで一つ聞いてもいい？」

「朝の話？ 運命の人のこと？」

「そう、それ。誰から聞いた話なの？」

「知りたい？」

「うん」

「じゃあ、教えてあげる。実はユウコから聞いたんだ」

「ユウコ？ それって経理にいる？」

「そうだよ。彼女今、西原さんとき合ってるのは知ってる？」

「えっ！？ それホント！？」

西原さんはわたしの一つ上の同じ商品開発部の社員で、一緒に仕事をしたこともある。わたしは驚いた、彼に恋人がいるなんて思わなかったから。

「知らなかったんだ、同じ部署なのに」

「うん。どうしてヒトミは知ってるの？」

「直接聞いたからよ、彼女に」

「そうなんだ。でも意外だな、彼に恋人がいたなんて」

「わたしも最初はびっくりしたわ、でもね、彼女の話聞いて納得したの」

「どういうこと？」

「一目惚れしたんだって、会社で偶然助けてもらったときに」

「助けてもらった？ 何かされたの？ 彼女」

「言い寄られていたのよ、好きでもない人に。一緒に夜飲みに行かないかって。そこで彼が間に入って相手を追い払ってくれたんだって」

「すごい！ かつこいいいな西原さん」

「でね、そのときお礼の言葉を言つと向き合ったとき……」

「ん？ どうしたの？」

「急に心臓の鼓動が高鳴ってきて、胸が熱くなったんだって」

「へえー、そうなんだ。それでそのあとは？」

「彼女が彼を呼び出して告白したそうよ。そしたら彼も好きだったみたいでつき合い始めたんだって」

「いい話だね」

「でしょ。だから朝の話、信じてみてね」

「わかった。なんか信じらそうかも」

「ふふっ、よかった」

彼女が朝してくれた話、それは意外にもちゃんと人からの体験談だった。わたしもいつかそんな瞬間がくるのかな、そう思ったときちよつと胸がドキドキした。

4、恋人がいること

4、恋人がいること

「着いた、ここだよ」

会社から歩いて7分ほど、ヒトミは大通りから少し中に入った小さなお店の前で立ち止まった。

「へえー、ここか。小さなお店だね」

「でしょ。ここおいしいスパゲティが食べられるんだ」

「スパゲティか、わたし大好き！ 誰に教えてもらったの？」

「さっき話してたユウコにだよ、入ろう」

「うん」

二人はお店に入ると席は7割くらい埋まっていて、窓際の二人用テーブルに案内される。さっそくテーブルの上に置かれたメニューを手にとってみる。

「何にしよっかなーっと」

「ねえ、ヒトミは前、何頼んだの？」

「確か…… 前来た時はユウコと一緒にで日曜日だったから、ランチがなくて…… このオススメのカルボナーラにしたわ」

「カルボナーラか、おいしそう！ でも今日は平日だからランチも捨てがたいなー」

「そうね、サラダとデザートと、食後のコーヒーまでついて850円、お得だし」

「あつ、見て見て、ヒトミ、これ」

「どうしたの？」

「スパゲティは選べるんだって」

「あつ、ホントだ！ じゃあ、ランチにして別々の頼もう！」

「うん」

二人は店員さん呼んでわたしがミートソースを、彼女がスープスパを注文した。

「けどさ、よくユウコ、こんなお店知ってるね」

「恋人がいるからよ」

「どういうこと？」

「女の子はね、恋人ができるとこういうお店に詳しくなるものなの」

「……なんで？」

「分からない？ このお店、ちょっと通りから外れたところにあるでしょ」

「あつ、そっか、女の子ばかりいるお店だと男の人、いやがっちゃうもんね」

「そう、そういうこと。その点このお店は昼間の人が少ない時間を外せば女性客が少なく、男の人にもすんなり入ってもらえる。それに値段もリーズナブルで、おいしい！ デートには打ってつけの場所だよ」

「そうだね。わたしも覚えとこ」

「じゃあ、早く新しい恋人作らないとね」

「うん」

「あれ？ でも前の恋人とはこんな店行かなかったの？」

「あまり行っていないな、好きじゃなかったみたいだし」

「そうだったんだ」

「うん。告白してくれたんだけど、わたしに。そんなに親しくならなかったな、結局浮気されちゃったし」

「あまりいい人じゃなかったって、言ってたもんね」

「……そう。はあつ、どっかにいい人いないかな」

「私も、恋人ほしいな」

季節は寒い冬、人肌が恋しくなる時期。恋人のいない二人の話は若干暗いものになりつつあった。

5、営業部の彼

5、営業部の彼

そんな暗い気分になって少し話しが途切れているところに、サラダとそれぞれスパゲティが運ばれてきた。おいしいそうな匂いを見た目に俄然テンションが上がる。

「おいしいそう」

「いただきますーす！」

「いただきます」

さっそく二人はフォークを手にとって自分のスパゲティを口にする。

「おいしい！ トマトの味がすごく効いてるよ、これ」

「こっちもおいしいよ！ スープが最高！」

「ねえ、一口ちょうだい」

「そっちもちょうだい」

二人でスパゲティのお皿を交換する。

「あつ、こっちもおいしい！」

「このミートソースもおいしいね」

おいしい食べ物は二人の表情を笑顔に変え、暗くなっていた気分を明るくしていった。再びお皿を交換してさっきの話し続ける。

「でさ、さっきの話しが続きだけど、ヒトミ」

「なに？」

「誰かいい人ついていないのかな？ うちの会社に」

「うーん……前の彼は別の会社の人だったけ？」

「そうだよ。でも今度は同じ会社の人がいいかなって、うちの社内恋愛は公私混同しなければいって、禁止されてないし」

「そうだね。同じ社内だと近くにいて会いやすいもんね」

「そうそう」

「でも商品開発部の人では誰かいらないの？」

「あまり……、なんかうちの部署お調子者ばかりでさ」

「ははっ、そうなんだ。そういえば西原君も結構お調子者だもんね」
「そうそう。でも彼は意外といい人だったよ、一緒に仕事したときは真面目に頑張ってくれたし」

「へえー、そうなんだ。だから恋人ができたのかもね」

「だろうな。あつ、そういえば西原君、よく一緒に仕事してる相手がいいたような」

「男の人？」

「うん。確か別の部署で……」

「あつ、それって井上さんのこと？」

「井上さん、名前は知らないけど、その人じゃないかな」

「井上さんなら営業部の人だよ。西原君の同期みただけでかなり成績もいいみたいね」

「そうなんだ。でもそれだと恋人とかいるかも、知らない？」

「知らないなー、挨拶ぐらいしかしたことないしね」

「そっかー。じゃあ、今度会えないかな」

「今日会えるかもよ」

「まさか、そんな都合良くは無理でしょ」

「分かんないよ、いいことは重なるっていうしね」

「そうだけど……」

まだこのときは全く信じていなかったわたし。

でも今日の帰り道、その運命の赤い糸に引き寄せられるかのように二人は出会った。

6、運命の出会い

6、運命の出会い

わたしは出会った、運命の人に。それは突然だった、何の前ぶれもなく心臓の鼓動が高鳴って、気がついたら二人は向かい合ってた。立っていた。

会社帰り、駅までの道、わたしは足を止めた。よく晴れている空、見つめる視線の先は沈みゆく夕日。東から西へ、青から濃いオレンジに染まっていく空、わたしはその先に引き寄せられるように歩いて行った。

（きれいー。あつたんだ……こんな街の真ん中に……）

気がつくとなたしのそばには一人の男性が立っていた。わたしと同じように沈みゆく夕日を見つめている。年はおそらくまだ20代前半、よく見ると会社ですれ違ったことがあるような気がした。

（誰だっけ？ ……話しかけてみよう）

「あのお……すみません」

「はい」

すると彼はこっちを向いて問いかけに応じてくれた。

しばらく見つめ合う二人、なぜだか心臓の鼓動がどんどん早くなっていく。その瞬間嬉しさがこみ上げてきて、身体を中心に何か熱いものが駆け巡る。名前を聞いてみる。

「あなたは？」

「僕ですか？」

「はい」

「井上勇太っていいです。君は？」

「えっ!？」

（まさか今日本当に会えるなんて……。でもなんだろう身体が熱くなってきた、なぜか胸がドキドキする。この人がわたしの……運命

の人？)

「ん、どうかした？」

名前を聞かれた、ただそれだけに驚いてしまったわたし。こんなことはもちろん初めて、でも身体の反応から察するにこの人が運命の人に違いなかった。

「うんうん。わたし、藤井美香です」

「藤井さんか。仕事帰り？」

「はい。わたし、新日西産業に勤めていて」

「えっ、じゃあ、僕と同じ会社か」

「ふふっ、そうみたいです。ここからの夕日、きれいー」

「ああ。ビルの谷間に沈んでいくオレンジ色の夕日、そして東から西に赤く染まっていく空、この景色は最高だよ。あっ、そうだ、これからどうです、一緒に帰りませんか？」

「はい、喜んで」

嬉しかった、運命の人に出会えて。わたしは一緒に歩いて帰った、家までの道を。二人はなんと住んでいるアパートも近くて、最寄りの駅も同じだった。

間違いない、わたしには確信があった、この人が運命の人だ。

そして出会った二人は10月につき合い始め、12月に結婚した。

〈END〉

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7082p/>

出会い（『夕日』の番外編）

2011年1月11日12時40分発行